

上北地区統合校開設準備委員会（第1回）概要

日時：令和元年5月16日（木）

13：30～15：15

場所：県立三本木農業高等学校 2階 大会議室

<出席者>

○委員

齊藤 聖一 委員、水尻 和幸 委員、吉田 繁徳 委員、岡田 寛紀 委員、遠藤 剛 委員、沼山 喜久男 委員、丸井 英子 委員、瀧口 孝之 委員、長谷川 光治 委員

○オブザーバー

県立十和田西高等学校

田中 正也 教頭、山田 義光 事務長、福島 智 教務主任

県立六戸高等学校

奈良岡 隆樹 教頭、上村 奈加子 事務長、種市 誠 教務主任、

県立三本木農業高等学校

円子 昭浩 教頭、太田 良孝 教頭、柴田 富由紀 事務長、佐々木 伸介 教務主任、佐々木 篤 農場長

1 開会

2 委嘱状交付

- 三戸教育次長から各委員へ委嘱状を交付した。

3 設置要綱説明

- 事務局から資料2により設置要綱の概要について説明した。

4 委員長及び副委員長選出

- 委員長に長谷川 光治委員、副委員長に遠藤 剛委員を選出した。

5 事務局説明

(1) 青森県立高等学校教育改革推進計画第1期実施計画

- 事務局から資料3により第1期実施計画の概要について説明した。

(2) 上北地区統合校の設置に向けた検討の進め方

- 事務局から資料4により検討の進め方について説明した。

6 学校紹介

- 委員長から統合対象校の校長に対し、それぞれの学校の状況について説明を

求めた。

○十和田西高校（齊藤委員）

本校は平成元年に十和田西高校としてスタートしたので、経過年数は数えやすく、平成30年に30周年となった。平成10年度に観光科が設置され、普通科40名、観光科40名の合計80名となった。その後、平成15年度からは35名学級となった。観光科を設置している学校は全国的にも珍しく、観光科として設置している高校は11校で、その内1校は私立高校である。そのほか観光コースとして設置している高校が2校となっている。夢や希望を持って学べるよう他県の観光科設置校と連携をしているところである。

生徒の状況については、定員210名に対して在籍生徒数は154名であり、定員に対する生徒数の割合は73%となっている。若干定員割れはしているが7割以上の入学者数は確保されている。

また、出身市町村については十和田市が約96%となっている。他に県外中学校出身の生徒がいるが、十和田市内に転居して通学している。

観光科で特徴的なのは、2、3年次に設置している「旅行業務」や「観光表現」といった科目で、生徒は県内で本校しか学べない科目を勉強している。観光に特化した学習を平成10年度から進めており、国立公園がある自治体も多くないことから、その資源を活用した学習環境を先人たちが創り上げてきたものと理解している。

生徒の進路先については、各種大学、専門学校等に進学しているほか、4割の生徒が就職している。観光科の生徒が旅行業に関する仕事に就くことはむしろ少なく、観光を題材とした学習により必要な力を身に付け、社会的要請に応えられる人材を育成している。

さらに、観光に関する学習の特徴的なものとして、地域学習、ボランティアガイド実習がある。具体的には1年次で十和田・奥入瀬の歴史、自然、文化等についてNPOの協力を得ながら学習し、1年次の末にガイド認定試験を受ける。これまでは全員が認定試験に合格し、2年次の秋には実際にガイドとして活動している。この学習が生徒の力になっていると感じる。郷土愛を育む教育が最近求められているが、この取組が非常に役に立っていると感じている。

○六戸高校（吉田委員）

校歌の歌詞は、校訓である「自主自律、誠実勤勉、心身健康」を易しく言い換えたものとなっている。

本校は、昭和56年度に普通科定員135名で開校した。今年で39年目となる。平成5年度には3名、平成6年度には6名、平成7年度には6名、平成15年度には15名、平成24年度には35名の定員減となり、現在は70名の定員となっている。

学校経営方針として3つの校訓を掲げており、教育目標も校訓に基づいている。本校は、勉学や部活動等を通して豊かな人間性を育むことを方針としている。

また、自分の可能性を自分自身で広げるため、ボランティアで社会経験を積む本校独自のメイプルボランティアという科目もある。さらに、本校は豊かな自然に恵まれていることから、六戸町と協同して地域環境を材料とした探究的な学習を展開していきたいと考えている。

現在の生徒数は、1年生70名、2年生56名、3年生63名、計189名である。また、三沢市、十和田市、おいらせ町出身の生徒もそれぞれ4分の1程度を占めている。小規模ながら地域との連携を図り、探究的な活動等により生徒の人間性を育むこととしている。

○三本木農業高校（遠藤副委員長）

本校の沿革は、まず明治31年度に青森県農学校としてスタートし、その後校名は様々変わったが、昭和23年度に現在の校名である三本木農業高校となり、昨年度創立120周年を迎えたばかりである。また、昭和42年度には通常の農業高校とは異なり、大規模な農場を有した上で文部省指定自営者養成農業高校となった。昭和44年度には「志岳寮」が建設され、寄宿舎教育を開始し現在に至る。

平成10年度には自営者養成農業高校から農業経営者育成高校となった。これは寄宿舎教育を行っている農業高校のことである。全国には26校あり、その内私立高校が2校となっている。三本木農業高校は「本校舎での教育」、「農場での実学」、「寄宿舎での学び」の3つがあって初めて本校の学習環境が整備されていると言える。

校地については、昔の単位で言えば50町歩、つまり50ヘクタールの広さとなっている。また、定員はほぼ充足されている状況である。

農業高校の学習内容は、食料生産に限らず、食品加工や農村の活性化まで幅広く及ぶことから5つの学科を置いている。学科も開校以来様々な変遷を経て現在に至る。過去には獣医科、普通科、商業科が設置されていたこともある。

また、本校を舞台とした映画が制作されたり、本校の取組が書籍として刊行されたりするなど、対外的にも評価されているものと感じている。

続いて1年間の学びについて御説明したい。我々は1年間を1農年と呼び、春夏秋冬それぞれの季節に応じて必要な農業の取組を実践している。

次に、各学科についてである。植物を学ぶ学科が植物科学科であり、植物の栽培・経営のプロフェッショナルを目指している。動物を学ぶ学科が動物科学科であり、動物の飼育・経営・活用のプロフェッショナルを目指している。鶏、牛、豚のほか、馬や犬等の社会動物についても学習している。また、栽培や飼育を学ぶだけでなく、農業機械を修理することも必要であり、そのようなことを学ぶのが農業機械科である。この学科では自動車の3級整備士の受験資格を取得できる。環境土木科はかつての農業土木科であり、一般土木を学びながら造園を含めた学習を深めている。農業経済科はフードシステムを構築するプロフェッショナルを目指し、農業の経営や流通について中心的に学ぶ。

単に農業後継者を育成するだけでなく進学指導もしている。大学に進学できる

体制を作りながら、地域の農業を支える人材を育てている。部活動でも子どもたちがのびのびと活動できる環境を整備している。

また、本校では「志岳寮」と称する寄宿舎を設置し教育している。1年間、24時間寝食を共にしながら指導している。入寮する4月当初は家族と離れることで涙していた生徒が、寄宿舎での学習を終え退寮する際には、寄宿舎を出たくない思いで泣くこともある。卒業式では泣かないが退寮式では泣く生徒もいる。

次に、農業高校の甲子園とも言われる農業クラブについてである。全国の農業クラブ大会において、これまで26回日本一になっている。

通学範囲については十和田市、三沢市、上北郡のほか、八戸市、三戸郡、むつ市、下北郡、県外からも通ってくる。よって、県内一円からここで学びたい生徒が集っている。

7 意見交換

(1) 上北地区統合校における目指す人財像について

■ 委員長から事務局に対し、目指す人財像の考え方について説明を求め、事務局から資料3により目指す人財像として、「社会の一員として地域づくりに意欲的に参画する人財」、「地域資源の活用に創造的に取り組み、地域の発展に貢献する人財」、「農産物の生産とその生産を支える環境、加工、流通、販売等について学び、地域産業を支える人財」の3点を基本とする旨説明した。

■ 委員長が上北地区統合校の目指す人財像としては、第1期実施計画に掲げる3点を基本とする旨確認し、委員から了解された。

(2) 上北地区統合校の学校像について

■ 委員から次のような意見があった。

○ 統合される3校でそれぞれの伝統や良さがある。例えば六戸高校はボランティア学習が特色であるが、新しい学校でもそのような良いところを引き継いでもらいたい。

○ 第1期実施計画において、上北地区統合校は普通科2学級、農業科4学級とすることとなっている。一方、4月に柴山文部科学大臣が中央教育審議会に対し、生徒の学習意欲を高めるための普通科の在り方について諮問したとの記事を目にした。既に第1期実施計画において、上北地区統合校の普通科は2学級としているが計画どおり行くのか。十和田西高校や六戸高校において特色ある教育課程はあるが、十和田西高校は観光科であり普通科ではない。それを無理矢理普通科の枠組みの中で検討していくのか。この点を確認してから協議を進めたい。

→ (事務局) 第1期実施計画は、青森県立高等学校将来構想検討会議の答申を踏まえ基本方針を策定した上で、様々な方からパブリック・コメント等でその都

度御意見をいただきながら策定したところである。したがって、この計画で進めていきたいと考えている。

- 十和田市にとっては、観光科にこだわりを持っている。また観光科に対する思いもある。普通科の1コースとして、希望に応じて観光の学びを選択するといった曖昧なものではなく、きちんと打ち出してほしい。

計画には「十和田西高校の観光科の学びは上北地区統合校に引き継ぐ」とあるが具体性が見えない。何となく県教育委員会で策定した学科の案で行きたいように感じる。

観光科が地域にどれだけ貢献してきたかを考慮していただきたい。また、十和田市は観光と農業を基幹産業としていることから、観光科は捨てきれないところであり、今年度も県に対し、昨年度に引き続き観光科の設置を要望することとしている。

- 地域に住む大先輩の一人として、これからの子どもたちに期待する部分を含めて話したい。

青森県は農業県であり、特に上十三地区は都市ではないことは確かである。農業、農村、地域という枠組みの中で、かつては各家庭に子どもが多くいたため、農家の後を継ぐ者がおり、この地域の農村が保たれてきた。しかし、最近では子どもの数が減ってきており、農業の後継者も不足している。そのような中、地域に残り自分たちの郷土として生きがいを感じるような教育を進めてほしい。

例えば、2学級が普通科になる中、どうやって農業科と普通科の子どもたちが一緒になりながら共通の思いを持てるだろうか。そのために、一番は他の普通科では真似できない、農業科の広大な農地と設備を活用し、自然を教材としながら、子どもたちの成長に役立てられないか。普通科出身でも農業に就く者もいれば、農業科出身でも農業に就かない者もいる。上北地区統合校特有の普通科にし、地域を自分たちで愛していく意気込みを持てるような学校像であってほしい。

- 観光や農業の新しい時代を見据えるため、チャレンジ精神、コミュニケーション力、郷土愛が求められると思う。今後は、ますます複雑な時代になるので、子どもたちの能力を最大限引き出せるような学校であってほしい。

- 農業は「作る」だけでなく、最近は「どうやって売るか」まで重要になっていることを考えると、十和田西高校の観光科の学びに通じるのではないか。したがって、統合校の施設設備については安全安心ももちろんだが、3校が統合され新しくなるので、各校の良さを施設的に生かせる学校にしてほしい。

- かつての農業は作るのが主であったが、今は売ることが作ることと同じく大事である。そう考えると新しく学科を増やせないとしても観光の軸が出てくる

ような配慮ができないか。これは要望である。

■ 委員長が上北地区統合校の学校像としては、各校の特色ある教育活動の発展や、それをかなえる施設整備などの意見があったことを確認し、委員から了解された。

■ 瀧口委員が所用のため退席。

(3) 校名案の決定方法について

■ 委員長から事務局に対し、想定される校名案の決定方法について説明を求め、事務局から資料5及び資料6により、A案（事前公募方式）とB案（事後意見照会方式）について提示があったほか、上北地区統合校の校名については、地域に親しまれる校名とするため、これまでの校名の付け方と同様に地名を付すことについて説明した。

■ 委員長から各委員に対し、校名案の決定方法について意見を求めたところ、委員から次のような意見があった。

○ B案で良いと思うが、あえて校名を3つも4つも挙げる必要はないのではないか。むしろ1案に絞るよう話し合いで努力してみるような方法はどうか。各委員が1案ずつ持ち寄り、数が多い少ないで決定する問題ではないのではないか。統合校に入学する生徒が誇りを持てるような、期待の持てるような校名になるよう、委員による話し合いで進めれば良いのではないか。

○ 3校統合なので全く新しい校名にするのか、あるいは統合される高校の名前を引き継ぐのか、校名の方針をある程度決定してから、校名の決定方法を選ぶのはどうか。ただし、統合される高校の名前を引き継ぐ場合には、皆さんに理解される明確な根拠が必要になるだろう。

いずれにしても、校名に対しては様々な思いがある。全部の名前を合わせることもできないだろう。また、仮に十和田東高校としたら伝統が消えるとの声も出てくるだろう。そのような思いを出していただいた上で、どのように折り合いをつけていくかといった話し合いをしたらどうか。A案、B案を決定するまでに議論が熟すよう、ある程度委員の中で方向性を出し合って決めることも必要である。

○ 委員の間で煮詰めてからということか。

○ 校名そのものについて議論するのではない。校名の大きな方向性について、全く新しいものにするのが良いのか、具体的には三本木農業高校は120年の歴史があるので、それを残そうかという意見もあるだろう。しかし、また一方

で統合校に普通科が設置される中、農業高校という名称で良いのかという意見もあるだろう。その点を出し合ってから、校名について検討してはどうか。

地域の方やOBの熱い思いを耳にしている。したがって、迷うところでもある。皆さんの御意見を聞いてから決定したい。まだ私の中ではすっきりしない思いである。

○ B案にすれば、委員それぞれの案を出していただきながら、各自の思いを表明してもらうことになるのではないか。

○ B案にする場合に、新しい校名にするのか、あるいは何かを引き継ぐのかという方向性を協議できれば良い。

○ 校名の大枠を決めてから決定方法を決めれば良いのではという意見か。

○ そのとおり。そうするとB案ということになるかもしれない。その前にもっと方向性に関する議論が必要と思う。

○ B案だとそのような議論ができないということか。

○ 仮にB案にしたとしても、その前に1度議論をしたいということである。

○ 校名より中身の問題だと思いながらも、校名も大事な問題と思っている。スケジュールもあると思うが、校名案の候補を最終的に決定するのは12月ということか。

→（事務局）年度内には報告書をいただきたいということである。

○ 私も今日A案かB案かを決めるのは早いと思う。確かに卒業生だけでなく地元中学生や地域の人たちも意見を持っていると思うので、広く公募すべき（A案）だと思うが、そのプロセスとして、校名案の方向性の意見をここで十分出し合ってから決めるべきではないか。誰もが納得するような校名と中身にすべきではないか。私も様々な方から意見を聞きたいという思いもある。

○ 年度内に校名案の候補を決めれば良いとのことなので、統合校の教育理念等を考えれば、それに見合った校名が出てくるのではないか。

個人としては、愛される学校にするため、広く公募する（A案）のが理想であるが、各委員も各学校を愛しており、地域の未来に夢を持ってこの会議に臨んでいる。したがって、B案ということにしつつも、時間をかけて話し合っ、各委員から意見を出し合っ、その中で決めていくのが良い。教育理念や学校の在り様等についても話し合いたいところである。

- 私は完全にB案に賛成である。外郭団体である後援会等の意見も聞きながら意見を述べることにしたい。私は十和田西高校出身であるが、自宅は三本木農業高校の近くということもあり、未来を担う子どもたちを育てる高校のことなので、真剣に委員会に臨みたい。
- 校名と中身が合致していなければいけない。そういう意味ではカリキュラムまである程度見込んで議論しながら校名を検討すべきではないか。ある意味では中途半端になるかもしれないが、総合的に検討していけば良いのではないか。意見としてはB案に近い。聞くところによると公募にすると何百という応募数になっているとのことであり大変だと思う。
- 決定方法としては、B案がふさわしいのではないかと考える。
- 私個人としては、地域や関係者の思いはあると思うが、県民から意見を聞く(A案)のが一番良いと思っている。
- 委員長が校名案の決定方法としては、B案(事後意見照会方式)とするが、第2回開設準備委員会では具体の校名案候補ではなく、まずは「新しい校名にするのか」、「統合対象校の校名を引き継ぐのか」という視点で校名案の方向性について協議する旨確認し、委員から了解された。

また、委員長から、第2回開設準備委員会で具体の校名案候補を委員から提示しても構わない旨発言があった。
- 事務局が第2回開設準備委員会の資料準備のため、文書で事前に各委員に対し校名案候補の意見照会を実施して良いか確認したところ、委員から次のような意見があったため、文書による事前照会は実施しないこととなった。
- 日程上や事務手続上、資料として叩き台が欲しいというのは理解しているが、まずは校名案の方向性に対する意見を伺いたい。その上で聞いて持ち帰って検討したい。
- 当然、校名案を検討する前に、関係者等から意見を聞く時間は必要になるだろう。その上で、それぞれ委員から意見を述べてもらうことになるのだろう。
- 次回委員会では、委員から校名案の方向性について意見をいただくこととしてほしい。その際に具体の校名案を各委員が示すかについては進行に任せる。ただし、次回委員会開催前に文書で各委員に意見照会するのは待っていただきたい。
- 校名案の意見一覧を10月に提示するスケジュールになっていたが、これが

1 2月にずれたとしても大丈夫だと思う。急がなくても良いのではないか。慎重に検討した方が良い。

- 委員長がオブザーバーに対し、第2回開設準備委員会の開催に向けて、各校の教育活動や部活動などの資料作成に協力を求めた。

8 閉会

9 三本木農業高校施設見学